

万葉集1817番歌の「明日者来牟等云子鹿丹」の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the Second and Third Phrases of the 1817th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集1817番歌「今朝行きて 明日者来牟等云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく」の第二句と第三句は古来難訓とされ未だ定訓をみない。最近の万葉集注釈書も訓みを保留にしている。この難訓箇所には写本による文字の異同があり、誤字や衍字などの可能性が指摘され諸説あるけれどもまだ定説となるには至っていない。

本論文では次のような解釈を提案する。まず第二句と第三句を「明日者来牟等 云子鹿丹」と区切り、歌全体を「今朝行きて 明日は来なむと 云ひしがに 朝妻山に 霞たなびく」と訓読した上で、歌の意味を「(朝帰りする男が妻に)『今朝は帰って行き明日は来よう』と言った(時の)ように朝妻山に霞がたなびいている」と解釈する。ここで大事なポイントは「霞たなびく」という表現である。この表現は通常は単に「春の到来」を表す決り文句にすぎないが、この歌では特に「朝妻」という名前の山に霞がたなびいていること、また「朝妻」は朝帰りする男を見送る妻を表すことから、この歌の作者は「朝妻山に霞がたなびいている」という自然現象の中に比喩的に「朝妻が別れを悲しんで心を曇らせている」という人事を重ねて表現し、その悲しみの原因として男が妻に「今朝は帰って行き明日は来よう」と言った時のようだと感じながらこの歌を作っている。

1. はじめに

万葉集1817番歌は巻十の「春の雑歌」と題する歌の一つである。まずこの歌の訓読文と原文を新日本古典文学大系本に従って掲載する([1], p.418)。ただし、第二句と第三句はまだ訓みが定まっていないので底本(西本願寺本)の原文のままとした。

10/1817 今朝行きて 明日者来牟等 云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

【原文】 今朝去而 明日者来牟等 云子鹿丹 旦妻山丹 霞霏霏

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

次に先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている原文、訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

①新日本古典文学大系^[1]

【原文】今朝去而 明日者来牟等 云子鹿丹 且妻山丹 霞霏霏

【訓読文】今朝行きて 明日者来牟等 云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

【現代語訳】今朝行って「明日者来牟等云子鹿丹」朝妻山に霞が棚引いている。

【注釈】「朝妻山」は、奈良県御所市朝妻、金剛山のことか。第二・三句は、難訓。西本願寺本の原文「明日者来牟等云子鹿丹」。元暦校本、「明日者来牟等云子鹿丹」。『全注釈』は、「明日（あした）は来（こ）ねと云ひしがに」と訓む。『私注』は、「明日（あす）は来なむと云ふ子かに」。『全注』は、「明日は来なむと言ひし子が」。『定本』、佐佐木『評釈』、澤瀉『注釈』、古典文学全集は、訓を施さない。本書も、訓釈を保留する。

②新編日本古典文学全集^[2]

【原文】今朝去而 明日者来牟等云子鹿丹 且妻山丹 霞霏霏

【訓読文】今朝行きて 明日は来むと云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

【現代語訳】今朝行って 明日は来ようと云子鹿丹 朝妻山に 霞がかかっている

【注釈】明日は来むと云子鹿丹——難訓。原文は底本に「… 来牟等云子鹿丹」とあるが、元暦校本などには「… 来牟等云子鹿」となっており、そのほうが原文に近い形か。「来牟」はコム、「来牟」はコネ（来ておくれ、の意）と読まれ、共に可能な本文だが、以下は読めない。一応、底本に従い、朝妻を起す序と解する説による。この朝妻は、早朝帰り行く男を見送る妻の意。この明日は、日没からアスになるという考え方で用いた。

③講談社文庫（中西進）^[3]

【原文】今朝去而 明日者来牟等 云子鹿 且妻山丹 霞霏霏

【訓読文】今朝行きて 明日は来なむと 言ひし子が 朝妻山に 霞たなびく

【現代語訳】私が「今朝は帰って行って、また明日は来よう」と言ったあの子、その朝妻山に霞がたなびくよ。

【注釈】今朝行きて明日は来なむ——朝の別れのことば。○言ひし子——「言ひし子」と朝妻は同じ。朝妻は朝の妻の姿。○（原文の第三句）鹿——底本「鹿丹」。「丹」は元（元暦校本）により削る。

④萬葉集注釈（澤瀉久孝）^[4]

【原文】今朝去而 明日者来牟等 云子鹿丹 且妻山丹 霞霏霏

【訓読文】今朝ゆきて 明日には来ねと 云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

【現代語訳】けさ行つてしまはれても明日にはいらつしやいねといふ…………… その朝妻山に霞がたなびかっている。

【注釈】明日には来ねと云子鹿丹——この二句古来の難訓である。文字の異同は「牟」の字、元、類（一・六）によつたが、紀、西以後は「牟」とある。「鹿」の字、元に「庶」とあり、「丹」の字、元には無い。訓は元にアスハコムトイフシカスカニとあり、類コシトイフシカスカニ、紀コムトイフシカスカニ、西、

細、陽、京（右に緒）キナムトイフコカニとし、矢、京（コを緒で消す）、附、寛コムトイフコカニとある。まづ第二句の訓であるが、「牟」の字によればアスハコムトイフと「云」を上につけて訓む事になる。しかし「年」と「牟」との誤字の順序から云へば、「年」より「牟」となる事が自然であり、古写本の時代から云つても「年」の方が原本の文字と認めるべきであらふと思ふ。「年」とすれば、「飛反来年」（二・一八二）の例の如く、コネと訓むか、「絶年云者」（四・六八一）、^{クニトシイハバ}「有年念者」（十三・三二四九）の如く、コムトシと訓むかである。前者であれば初二句は女の言葉になり、後者だと男の言葉だといふ事になる。私は前に『古径』三でこの歌の訓を考へてコムトシと訓んだ…（途中略）…即ち上三句は序で、「今朝は帰つても、すぐまた明日は来ようと云ひたくなるナア——その朝妻という名をもつた——その朝妻山に」とつゞくと解したのである。しかし右に述べたように第二句を訓んだ方が自然だと気づくやうになつたので、第三句は更に考へるべきものだと思ふのである。

朝妻山——南葛城郡葛城村に朝妻があつたが、今は御所市のうちにはひり、その字となつている。葛城山の南、今金剛山と呼ばれる東の麓の山である。

【考】流布本赤人集に「けささりてあすはきなんといひしかど かさつき山に」、夫木抄（廿「山」）「あすは来じといふしかすかに」とある。

⑤日本古典文学大系⁵⁾

【原文】今朝去而 明日者来牟等 云子鹿 旦妻山丹 霞霏霏

【訓読文】今朝行きて 明日は来なむと 言ひし子が 朝妻山に 霞たなびく

【現代語訳】朝妻山に霞がたなびいている。

【注釈】今朝行きて——以下第三句まで朝妻にかかる序であろう。第二句の終と第三句については、諸説があり、いまだ定訓を得ない。今、元暦本に「丹」なきにより、アスハキナムトイヒシコガとよむ。→補注。○朝妻山——奈良県御所（ごせ）市朝妻の地の山。

【補注】明日は来なむと言ひし子が——今朝帰って行って、明日はまた来ようと言った人の妻であるという意味から、朝妻を導く序と見る。このところ諸説あるが、首肯すべきものを見ない。

まず上にあげた五つの先行研究の問題点についてまとめておこう。難訓箇所訓み方の違いは別として、①から⑤のいずれも初三句を第四句の「朝妻」を導く序詞と解している。しかし、初三句が「朝妻」の序詞であるにしては第四句への接続の仕方が何となく不自然である。また、もし序詞だとすると、歌の実質的内容は「朝妻山に霞がたなびいている」という自然景観だけになるが、果たして作者は風景描写をするためだけにこの歌を詠んだのだろうか。

もう一つの問題は、この歌の初二句が男の言葉か、それとも女の言葉かという問題である。①は性別を明確にしていないが、②と③と⑤は男の言葉、④は女の言葉と解している。この問題が完全に解決されない限り、この歌の正しい理解はありえないだろう。

ところで、③と⑤は元暦校本に「丹」の字がないのを理由に底本原文の第三句「云子鹿丹」の「丹」を衍字として削除している。一方、④は第三句については底本の「云子鹿丹」を採用しながら、第二句の「明日者来牟等」では「牟」を「年」の誤字だとしている。その理由として元暦校本が「年」であり写本としても古いこと、誤字の起きる可能性としては「年」→「牟」よりも「牟」→「年」の方がより自然であることをあげている。しかし「年」→「牟」の誤写と「牟」→「年」の誤写の可能性に有意な差があるとは思えない。また、もし元暦校本によって第二句の「牟」を「年」の誤字とするのであれば、第三句においても元暦校本によって「鹿丹」の代わり「庶」をとるべきであろう。元暦校本の第三句は「云子庶」となっ

ているからである。ところが、万葉集の歌の原文には「鹿」の例は多数あるのに「庶」は一つもない。この事実は元暦校本の「庶」が誤字であることを強く示唆しており、それゆえ第二句の「牟」についても元暦校本の「年」の方が誤字である可能性は高い。以上のような理由から、底本（西本願寺本）の原文の方が信頼性は高く、本論文では底本原文に従って訓読と解釈を試みる。

2. 「明日者来牟等云子鹿丹」の訓みと解釈

古来難訓とされてきた「明日者来牟等云子鹿丹」のうち先頭の三文字「明日者」は「あすは」と訓めるから、未訓読部分だけに下線を引いて1817番歌を再掲すると次のようになる。

10/1817 今朝行きて 明日は来牟等云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

この未訓読部分を解説するために、まず歌の前半部「今朝行きて 明日は来牟」に着目し、万葉集中にこれと似た表現がないかどうかを調べた結果、次の歌が存在することがわかった〔6〕。

05/0870 ^{ももか}百日しも 行かぬ松浦道 ^{けふ}今日行きて ^{あす}明日は来なむを 何か障れる

【原文】毛々可斯母 由加奴麻都良遲 家布由伎弓 阿須波吉奈武速 奈尔可佐夜礼留

【現代語訳】百日間もかかって行く距離でもない松浦への道は、今日行って明日は還って来られるのに、何の支障があるというのでしょうか。

この歌は筑前国守の山上憶良が、遠い昔に松浦佐用姫がヒレを振ったという「ヒレ振りの嶺」や神功皇后が立って鮎を釣ったという石などを見に行きたいが（筑前国府から松浦までは距離も近い）多事多忙ゆえに実現できないのを嘆いて詠んだ三首（868～870番歌）のうちの一首である。ここで注目したいのは、一字一音表記された第三句と第四句「今日行きて 明日は来なむ」の部分である。この「今日」を「今朝」に置き換えると1817番歌の初二句「今朝行きて 明日は来牟」とまったく同じ表現である。そこでとりあえず1817番歌を次のように訓むことにしよう。

10/1817 今朝行きて ^{あす}明日は来なむと 云子鹿丹 朝妻山に 霞たなびく

ただし、そのためには原文の「来牟等」が「きなむと」と訓める根拠を示しておく必要がある。「来牟等」を「こむと」と訓むのは簡単だが、これだと第二句が六音の字足らずになるので、「来」の次に「な」を補って「きなむと」と七音で訓めるかどうか、この点が問題になる。澤瀉久孝氏は第1節の④で「来牟」を「来なむ」と訓むのは「牟」をナムと訓む例がないから適切ではないと述べているが（④の注釈の「途中略」）、実は一例だけ存在する可能性がある。次の歌の第二句である（〔1〕、p.464）。

10/1993 外のみに見つつ恋ひなむ（見筒恋牟） 紅の 末摘花の 色に出せずとも

この歌の第二句原文は底本（西本願寺本）では「見筒恋牟」となっており、新日本古典文学大系、新編日本古典文学全集、講談社文庫本などはともに「見つつ恋ひなむ」と訓んでいる。もしこの訓み方が正しければ「牟」を「なむ」と訓む確例が存在することになる。

ところが、日本古典文学大系は「見筒恋牟」を「見つつ恋ひせむ」と訓み（[5]、pp.86-87）、また澤瀉氏は底本（西本願寺本）の「見筒恋牟」ではなく元暦校本の「見箇恋牟」（第二文字が「筒」ではなく「箇」）に従って「見つつか恋ひむ」と訓んでいる（[4]、pp.205-207）。

そこでまずこの二つの訓み方の妥当性について検討することにしよう。日本古典文学大系の「恋牟」を「恋ひせむ」と訓むことが妥当であるかどうかを調べるために、万葉集中で「こひす=恋す」という動詞の活用形を含む例をすべて調べてみた。結果は11例で以下に示すとおりである。ただし、一字一音表記された例はここでの参考にならないから除外した。丸カッコ内は原文表記、右側の数字は歌番号である。

恋すれば（恋為者）… 2936、3255、3262
 恋するに（恋為）… 2390
 恋すとそ（恋為登曾）… 3016
 恋する道に（恋為道）… 2375
 片恋しつつ（片恋為乍）… 1473
 片恋せむと（片恋将為跡）… 117
 長恋しつつ（長恋為乍）… 3193
 かく恋すらむ（如是恋為良武）… 1986
 恋せしよりは（従恋者）… 2445

以上の結果から、最後の1例を除き「恋す」の「す」を表すために「為」の字が添えられていることがわかる。例外は最後の2445番歌で「恋せし」が「恋」の一字で表記されている。したがって、一例とはいえこのような例が存在することは1993番歌の「恋牟」を「恋ひせむ」と訓んでもよいことになるだろうか。しかしこの結論は早計である。というのは、2445番歌は柿本人麻呂歌集に含まれる「略体歌」と呼ばれる助詞や助動詞をほとんど省略するタイプの歌で、1993番歌（これは「非略体歌」に属する）とは表記方式が基本的に異なるからである。この点は後に述べる澤瀉氏の訓みについても当てはまる。以上のことから、「非略体歌」である1993番歌の「恋牟」を「恋ひせむ」と訓む確かな根拠は存在しないという結論が得られる。

さて今度は澤瀉氏の「見つつか恋ひむ」という訓みの妥当性について検討しよう。ここで注意すべき点は、澤瀉氏は原文として底本（西本願寺本）の「見筒恋牟」ではなく元暦校本の「見箇恋牟」（第二文字が「筒」ではなく「箇」）を採用している点である。この場合に問題となるのは「見」の一字を「見つつ」と訓むことができるかどうかという一点につきる。そこで万葉集中から「つつ」という助動詞を完全に省略した表記例をすべて調べてみた。結果は次の5例である。

見つつしのはむ（見偲）… 1248、2334
 恋ひつつぞ居る（恋居）… 2379
 恋ひつつやあらむ（恋有）… 2406
 偲ふらむ（偲）… 2460

澤瀉氏も以上の5例をもって「見筒恋牟」を「見つつか恋ひむ」と訓む根拠としている。ところが、ここにあげた5例はすべて柿本人麻呂歌集に含まれる「略体歌」タイプに属する歌で、先の日本古典文学大系の訓みの場合と同様、「非略体歌」に属する1993番歌とは表記方式が基本的に異なるものであり、「略体歌」

の訓みの例をもって「非略体歌」の訓みを正当化することは必ずしもできない。

以上見てきたように、1993番歌の第二句「見筒恋牟」を「見つつ恋ひせむ」と訓むことも、また「見筒恋牟」として「見つつか恋ひむ」と訓むことも妥当ではないことがわかった。

それでは「見筒恋牟」を「見つつ恋ひなむ」と訓むことは妥当だろうか。次にこの点について検討してみよう。まず「恋ひなむ」という表現自体が存在することは次の二つの確例によって確かめられる（〔7〕、pp. 50-51、pp. 101-102）。

11/2548 かくだにも 我は恋ひなむ（吾者恋南） 玉梓の 君が使ひを 待ちやかかねてむ
11/2767 あしひきの 山橋の 色に出でて 我は恋ひなむを（吾恋南雄） 逢ひ難くすな

この二つの歌の「恋南」という表記が「恋ひなむ」であることは疑いない。実際すべての注釈書がそのように訓んでいる。ここで、上の2767番歌と次に再掲する1993番歌とを比較して欲しい。

10/1993 外のみに見つつ恋牟（見筒恋牟） 紅の 末摘花の 色に出でずとも

いずれの歌にも「色に出で」という表現と「恋」という表現が共通に含まれ、かつ1993番歌の「恋牟」は四音として訓まれるべきであるから、「恋牟」は2767番歌の「恋南」と同じく「恋ひなむ」と訓むのが最も自然であろう。このようにして「牟」を「なむ」と訓む確かな根拠の一つが得られる。もう一つの根拠は、先に示したように、1817番歌の初二句「今朝行きて 明日は来牟と」と非常に良く似た表現が870番歌に「今日行きて 明日は来なむを」とあることである。このことから1817番歌の「来牟」もまた「来なむ」と訓むことが予想され、「牟」を「なむ」と訓むもう一つの根拠が得られる。以上二つの根拠から「牟」を「なむ」と訓むこと、したがって1817番歌の第二句「明日者来牟等」を「明日は来なむと」と訓むことの妥当性が示される。

こうして残された問題は1817番歌の第三句「云子鹿丹」の訓みだけとなる。そこでまず「云子鹿丹」に含まれる四字について個別に検討していこう。まず「云」については、万葉集中に162例あるが（1817番歌は除く）、「云々」の形で「かにかくに」と訓む4例を除けばあとはすべて「いふ＝云ふ」という動詞の活用形「いは」、「いひ」、「いふ」、「いへ」のいずれかである。したがって1817番歌の「云」もこの四つの活用形のいずれかで訓むことはほぼ確実であろう。

次に「丹」については、万葉集中に205例あるが（1817番歌の第三句「云子鹿丹」は除く）、二つの例外を除いてすべて「に」と訓まれている。例外の一つは806番歌の第五句「由吉帝己牟丹米（行きて来むため）」である。ここでは「丹」を字音「タン」に基づいて「た」と訓ませている。残りの一つは3791番歌の難訓箇所「信巾裳成者之寸丹取為支屋所経」の「丹」である。したがって、今問題にしている1817番歌の「云子鹿丹」の「丹」が「に」であることはほぼ確実であろう。

残りは「云子鹿丹」のうち「子鹿」の訓みである。「云子鹿丹」は五音の句であるから、上で述べたように「云」が二音、「丹」が一音であることを考慮に入れると「子鹿」は二音で訓まなければならない。よって「子鹿」の訓みは「こか、こが、しか、しが」のいずれかに限られる。ちなみに、「子」を「し」、「鹿」を「が、か」と訓む確例は次のとおりである（丸カッコ内の番号は歌番号）。

子(し)....「安布余志勿奈子(逢ふよしもなし)」(807)、「伊野那都可子岐(いや懐かしき)」(846)
鹿(が)....「角鹿乃浜従(つのがの浜ゆ)」(366)、「滓鹿能山尔(かすがの山に)」(1844)

鹿(か)....「何時鹿越奈武(いつか越えなむ)」(83)、「雖見不飽鹿裳(見れど飽かぬかも)」(2111)

以上の検討結果を考慮して「云子鹿丹」のすべての訓みについて検討した結果、歌として意味をなすのは「云ひしがに」と「云ひしかに」の二つだけであることがわかった。以下、この二つの訓みについて検討しよう。まず「云子鹿丹」を「云ひしがに」と訓んだ場合1817番歌は次のようになる。

10/1817 今朝行きて 明日は来なむと 云ひしがに 朝妻山に 霞たなびく

この「云ひしがに」は文法的に「云ひ+し+がに」と分解することができる。

云ひ.... 動詞「云ふ」の連用形

し.... 活用語の連用形に付いて「過去」を表す助動詞「き」の連体形

がに.... 活用語の連体形に付いて「～するように」を意味する助詞

上代語の助詞「がに」には二通りの用法があり、『時代別国語大辞典上代編』によると、一つは活用語の「終止形」に付き「～ほどに、～そうに」を意味する用法である（〔8〕、p.204の①の意）。次の例がある（〔1〕、p.453）。

10/1951 うれたきや 醜^{しこ}ほととぎす 今こそば 声の囀^かるがに（音之干蟹） 来鳴きとよめめ
 （大意）ええ、憎たらしいばかホトトギスだ。今こそ声もかされるほどに来て鳴き響かせればよいのに。

もう一つは活用語の「連体形」に付き「ある事柄を推量または希望する」意を表す用法である（〔8〕、p.204の②の意）。現代語の「～するように」と訳せる場合が多い。次の例がある（〔5〕、pp.343-344）。

14/3452 おもしろき 野をばな焼きそ 古草に 新草まじり 生ひば生ふるがに（於非波於布流我尔）
 （大意）趣のある野を焼くな。古草に新草が混じって生えるなら生えるように。

古今和歌集829番歌（巻第十六 哀傷歌）にも同じ用法の例がある（〔9〕、p.313）。小野篁が自分の妹を亡くした時に詠んだ歌である。

829 泣く涙 雨と降らなむ 渡り川 水まさりなば 帰りくるがに
 （大意）私の泣き悲しむ涙が雨となって降ってほしい。それで、三途川が洪水になれば、彼女がやむをえずこの世に引き返して来るように。

新編日本古典文学全集の注釈書はこの歌の結句の「がに」に次の頭注を記している（〔9〕、p.313）。

「がに」は命令・願望の表現（この歌では第一、二句）を受け、その理由を示す助詞。→三四九

先に示したように、『時代別国語大辞典上代編』は「がに」を「推量または希望」を表す助詞としているが、これに対して上の古今和歌集の頭注は「理由」を表す助詞としている。いずれの解釈が適切である

うか。おそらく後者であろう。というのは、古今和歌集829番歌の初二句は「自分の泣く涙が雨となって降って欲しい」という「願望」を表しているが、これに対して結句の「(この世に) 引き返して来るように」というのは「希望や願望」というよりはむしろ、歌の前半部で述べた「願望」がどういう「理由」から生まれてきたのかを説明しているからである。先に示した万葉集3452番歌についても、一見すると「がに」を含む歌の後半部は「願望」を表しているようにも見えるけれども、後半部は前半部の「趣のある野を焼くな」に対する「理由」を説明していると解するのが適切で、その方が古今和歌集829番歌とも整合性がとれるであろう。

さて、以上の準備をした上で万葉集1817番歌の解釈に移ろう。まず結果を示す。

10/1817 今朝行きて 明日は来なむと 云ひしがに 朝妻山に 霞たなびく
「今朝は帰って行き明日は来よう」と言ったように、朝妻山に霞がたなびいている

この直訳だけではまだ歌の真意がよく理解できないが、「朝妻山」と「霞がたなびいている」の意味を考えることによってそれが明らかとなる。おそらく奈良時代の人たちは誰しも、この歌の「朝妻山」という山の名前から「朝妻＝早朝に男の帰りを見送る妻」を連想し、「霞たなびく」から「朝妻が別れの悲しみで心を曇らせる」ことを連想したのであろう。この連想を前提にしてこの歌は作られており、そのように考えないとこの歌の真意は理解できない。先に活用形の「連体形」に付く「がに」は「理由」を説明するはたらきをもつことを述べたが、この歌でも第三句の「云ひしがに」の「がに」は「理由」を説明していると考えられる。というのは、この歌の作者は「朝妻山に霞がたなびいている」という自然現象の中に「朝妻が別れを悲しんでいる」という人事を比喩的に重ねて表現し、朝妻が心を曇らせている「理由」として、男が早朝に妻に「今朝は帰って行き明日は来よう」と言ったからだとして「想像上の理由づけ」をしているからである。

なお「霞たなびく」が「悲しみなどで心を曇らせる」ことの比喩であることは、以下の実例によって確かめることができる。万葉集には「霞たなびく(き)」を含む例が25件あるが、その多くは、

10/1844 冬過ぎて 春来るらし 朝日さす 春日の山に 霞たなびく

のように単に「春の到来」の決り文句として用いられている。ところが、中には以下の例に示すように「もの悲しさ」の気持ちを重ねて表現しているものがある。おそらく、霞で周りがかすんで見えなくなる自然現象を、比喩的に「人の心が晴れない様子」に譬えているのであろう。

04/0735 春日山 霞たなびき 心ぐく 照れる月夜に ひとりかも寝む
19/4290 春の野に 霞たなびき うら悲し この夕影に うぐひす鳴くも
20/4399 海原に 霞たなびき 鶴が音の 悲しき夕は 国辺し思ほゆ

ここの「霞たなびく」に込められた「悲しさ」は愛する人や家族を亡くした時のような「深い悲しみ」ではなく「もの悲しさ」である。朝妻が男を見送る場合の悲しさも、せいぜい一日程度の別れであるから「もの悲しさ」であろう。なお、朝妻みずからが別れの悲しみを詠んだ歌がある。

12/2893 朝去あしたいにて 夕ゆうへは来ます 君ゆゑに ゆゆしくも我は 嘆なげきつるかも

ここで「ゆゆしくも」とあるのは、わずか半日程度の別れで「嘆く」などと言うのは「憚られるけれども」という気持ちを表したものである。ちなみに、主な万葉集注釈書はこの「ゆゆしくも」を「忌むべきまでに」、「縁起でもなく」、「人目も恐れず」、「あさましい程に」などと大げさに解している。

以上が「云子鹿丹」を「云ひしがに」と訓んだ場合の解釈であるが、最後に次のことを補足しておきたい。実は、すでに50年以上も前に武田祐吉氏が第三句「云子鹿丹」を「云ひしがに」と訓み、「言ったように」と解しておられる（[10]、pp. 16-17）。ただし、第二句の訓みと歌の前半部を単なる「朝妻」の序とする解釈が本論文とは異なる。以下に武田氏の訓みと解釈を示す。

10/1817 今朝行きて 明日は来^{あした}ねと（明日者来年等） 云ひしがに 朝妻山に 霞たなびく
 （大意）わが妻が、今朝は帰つて明日はいらつしやいと云つたように、その朝妻山に霞がたなびいている

さて次に、「云子鹿丹」を「云ひしかに」と訓んだ場合の解釈について検討しよう。この場合は「云ひしかに」の文法構造を「云ひ+しか+に」と分解し、「云ひ」を「云ふ」の連用形、「しか」を「自己の動作に関する願望」を表す終助詞、「に」を逆説の接続助詞と見なして次のように解することができる。

10/1817 今朝行きて 明日は来なむと 云ひしかに 朝妻山に 霞たなびく
 「今朝は帰って行き明日は来よう」と言いたい（ところな）のに、朝妻山に霞がたなびくことだ

この解釈によれば、早朝に男が家に帰る時、妻に向かって「今朝は帰って行き明日は来よう」と言って別れようとした時に、妻が別れを悲しんで心を曇らせる様子を見て言い出すのをためらっている男の気持ちを詠んだ歌ということになる。

ところが、上のような解釈が成り立つためには、「しか」が「自己の動作に関する願望」を表す終助詞であることが必須である。実際、『時代別国語大辞典上代編』にも「しか」の見出し項目があり、そのように説明されている（[8]、p. 347）。ところがこれには疑問がある。というのは、万葉集にはこの「しか」が15例あるが（古事記と日本書紀の歌謡には例がない）、次に示す一例を除きすべて「てしか」の形で登場し、しかも後に示すようにこの一例も「てしか」と訓めるからである。したがって、「自己の動作に関する願望」を表す終助詞は通説のように「しか」ではなく「てしか」である可能性が大いにある。

11/2366 まそ鏡 見^みしかと思ふ（見之賀登念） 妹も逢はぬかも 玉の緒の 絶えたる恋の 繁きこのころ

通説ではこの歌の第二句原文「見之賀登念」は「み^みしかとおもふ」と訓まれている。ところが、これは「みて^みしかと（お）もふ」と七音（八音）でも訓める。その根拠は、第一に、「～と思う」という意味の「とおもふ」は「お」を脱落させて「ともふ」と三音で訓む確例が存在することである。

06/0966 大和道は 雲隠りたり 然れども 我が振る袖を なめしと思^もふな（無礼登母布奈）

この例に従うならば、2366番歌の「見之賀登念」の「登念」は「ともふ」と三音で訓むことができる。もちろん、次の例のように「とおもふ」と「お」を脱落させずに四音で訓むこともできる。

15/3633 粟島の 逢はじと^{おも}思ふ (安波自等於毛布) 妹にあれや 安眠も寝ずて 我が恋ひわたる

第二の根拠は、「見之賀登念」の「見之賀」は通説のように「みしか」と三音で訓むのではなく、「見」の次に「て」を補って「みてしか」と四音でも訓めることである。その根拠となる例は多数あるが、一例をあげよう。

08/1622 我がやどの 秋の萩咲く 夕影に 今も^{おも}見てしか (今毛見師香) 妹が姿を

この歌の第四句は七音で訓まれるべき句であるが、原文は「今毛見師香」とあり、「見」を「みて」と二音で訓まないと七音にはならず、通説でもそのように「て」を補って「いまもみてしか」と訓まれている。似たような例として、1627番歌の第四句と2880番歌の第二句に「今毛見壯鹿」という表記があるが、これも「見」に「て」を補い「いまもみてしか」と七音で訓まれている。別の例として、1531番歌の第三句に「今日見者」という表記があるが、これも「見」に「て」を補い「けふみては」と五音で訓まれている。以上、四つの例をあげたが他にも例は多数ある。

以上に示した二つの根拠から、2366番歌の第二句「見之賀登念」は通説では「見しかと^{おも}思ふ」と七音で訓まれているけれども、「見てしかと^{おも}思ふ」と七音で訓むか、あるいは「見てしかと^{おも}思ふ」と字余りながら八音で訓むこともできる。八音で訓んでも母音「お」が含まれるので「字余りの法則」に反しないからである。もし2366番歌の第二句の訓みが「見しか」ではなく「見てしか」であるならば、「自己の動作に関する願望」を表す終助詞は、これまで通説が言ってきたような「しか」ではなく「てしか」と改めるべきであろう。というのは、その場合「しか」単独で「自己の動作に関する願望」を表す確例が存在しなくなるからである。

なお、「自己の動作に関する願望」を表す終助詞を「しか」ではなく「てしか」と考える理由はほかにもある。確たる根拠とは言えないかも知れないが、自己の願望「～したい」を意味する北部九州の方言「～したか」の「たか」の原形は「てしか」であり、これが「てしか」→「たしか」→「たいか」→「たか」と変化した可能性がある。「しか」から「たか」への音変化はありえないが、「てしか」から「たか」へは可能である。

以上見てきたように、もし「自己の動作に関する願望」を表す終助詞が「しか」ではなく「てしか」であるならば、1817番歌の第三句「云子鹿丹」を「云ひしかに」と訓み、ここの「しか」を「自己の願望」の意に解することはできない。したがって、1817番歌の訓みとしては第三句を「云ひしがに」と訓む以外に選択肢はなく、ここに訓みが最終的に一つに確定することになる。

3. おわりに

本論文では、古来難訓とされてきた万葉集1817番歌の第二句と第三句「明日者来牟等云子鹿丹」について検討を行ない、「明日は来なむと云ひしがに」と訓み、『明日は来よう』と言ったようにと解することを提案した。そして最後の二句「朝妻山に霞たなびく」については、単に自然景観を詠んだものではなく、「早朝に男を見送る朝妻が別れを悲しんで心を曇らせている」という意味が込められていることを指摘した。

また、通説で「自己の動作に関する願望」を表すとされている終助詞「しか」は、単独で用いられている確例がなくすべて「てしか」の形で現れることから、この用法の終助詞は「しか」ではなく「てしか」

とすべき可能性がきわめて高いことを指摘した。以上のような提案や指摘が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

参考文献

- [1] 「萬葉集二」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 418、2000年。
- [2] 「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 26、1995年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注(二)」、中西進、講談社文庫、p. 306、1980年。
- [4] 「萬葉集注釋卷第十」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 18-21、1962年。
- [5] 「萬葉集三」、日本古典文学大系、岩波書店、p. 55、1960年。
- [6] 「萬葉集一」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 489-490、1999年。
- [7] 「萬葉集三」、新日本古典文学大系、岩波書店、2002年。
- [8] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、2005年。
- [9] 「古今和歌集」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 313、1994年。
- [10] 「増訂萬葉集全註釋八」、武田祐吉、角川書店、pp. 16-17、1956年。